

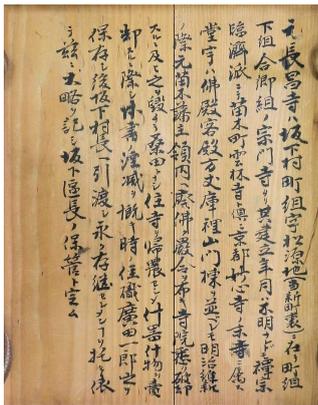
郷土文化財紹介

寺院遺跡シリーズ

< 萬歳山長昌寺遺跡 >

萬歳山長昌寺は、江戸時代には苗木藩雲霖寺の末寺として坂下村の行政寺を務めていました。だが、明治3年8月苗木藩は藩内の行政寺15カ寺を廃仏毀釈し、これにより消滅してしまいました。住職は還俗させられ帰農しました。

坂下駅前に立ち本町平を仰ぎ見ると、高さ50メートルぐらい急峻な河岸段丘の壁が南北に延びていて、駅前から本町平への移動は前傾姿勢を要する坂道で難儀です。この段丘崖を右上へ登る旭町筋は緩やかな坂道で、最上部で新町通りに直交します。この直交地点の右横数メートルにさらに上に向かう真っ直ぐな道がありますが、これは長昌寺の参道であったと伝承されてきました。だとすると、この真っ直ぐな道のどこかに山門があり、山門を入ると庭そして本殿が展開されていたこととなります。プール横から東側へ新町の途切れる辺りまでの敷地が考えられます。坂下村の行政寺としての威厳を感じさせる規模であったと想像できます。



↑ 過去帳箱の裏書き

がはっきりとします。どなたか保存してみえる方がお見えであるならぜひご教示ください。末尾に故原寛の推定図を添付します。

過去帳は明治何年かに坂下村区長に引き継がれ坂下町役場が保管し、今はふるさと歴史資料館< 栴蔵 >で4冊を展示していま

す。残念なことに5冊が在ったのですが、一番古い1600年代のものが失われてしまいました。過去帳には人名や集落名などが記されますが、その部分が分からなくなっていました。



↑ 過去帳4冊



↑ 木造釈迦如来座像

また、釈迦如来座像は下野法界寺に移され、その後坂下区長等の骨折りがり大門自治会の護国山蔵田寺に安置され、昭和40年に岐阜県重要文化財に指定されました。高さ46.5cm木造寄木造りで割首工法で作られているとのこと。したがって南北朝時代の作と前富山大学教授の指摘がありました。

最近、長昌寺縁の石臼が< 栴蔵 >へ寄贈されました。臼上部外側に「天明七丁未歳十二月吉日 長昌公用祖真新添之」と刻まれています。天明7(1787)年は天明の大飢饉で、祖真和尚が石臼を新調し何かの事業をされたのではないかと想像されます。



↑ 長昌寺公用石臼

新町から市道(農免道)へ出る道の左上段に10数個の石造物が並んでいます。これらは長昌寺観音堂の石造物と伝承されています。「坂下町の石仏・町組之部」(坂下の文化を守る会著)によると、写真前面の6体は六地藏で右から法印(畜生)、鶴亀(地獄)、宝性(修羅)、法性(天上)、地持(人間)、陀羅尼(餓鬼)の各地蔵で臨濟宗との関わりを示しています。後方に見える大きな石仏



は聖観音像で享保14(1729)年作です。観音堂と伝承されることから六観音が祀られていて、聖観音像の他に馬頭、十一面、如意輪、不空羅索、千手の各観音像があったのではないかと考えられます。

住職墓群も貴重な文化財です。墓碑の石造物無縫塔は風雨にさらされかなり劣化してきました。いつしか刻まれた住職名も判読できなくなります。「坂下における寺院研究 萬歳山長昌寺」(原寛記)では、住職名初世舜屋大堯和尚禅師とあり、山口の光西寺から見えられ曹洞宗で始まったようです。2世睡鷗祖津首座禅師は苗木雲霖寺の臨濟宗に組み込まれて行くようです。前述石臼を備えた祖真和尚は第8世で柏庭祖真首座禅師と住職墓無縫塔にあるそうです。

明治の廃仏毀釈で11世宥道祖英は還俗させられ、広田姓を名乗り帰農しました。



↑長昌寺住職墓群

こうして寺は取り壊され古材は売り払われ、古材の一部は町の有志が買い上げて、今の出雲福德神社の位置に「万歳座」の前身となる芝居小屋の建設に利用したと聞いています。その時、寄附を募った帳面3冊には「十二双劇場」と記されています。

故原寛推定図(坂下町史より)

